



TV Animation Series

V O L U M E O N E

Engage Kiss

©8CE / Project Engage



BAYCON
CITY

TV Animation Series Engage Kiss 1

EK

Engage
エンゲージ・キス
Kiss

クズと悪魔と男と女 ～Kisara～

丸戸史明

発行：2022年9月28日

発売元：株式会社アニプレックス
〒102-8353 東京都千代田区六番町 4-5

編集協力：萩原 猛（オルクス）

装丁者：BALCOLONY.

印刷・製本：株式会社ソニー・ミュージックソリューションズ

※本書は、法令に定めのある場合を除き、複製、複写することはできません。

※NOT FOR SALE

©BCE / Project Engage
ANZX/ZB 15641
Printed in Japan

【注意】

このSSは、TVアニメ『Engage Kiss』第一話「クズと悪魔と男と女」を、特定キャラクターの視点に限りなく寄せた作品となります。

そのため、特定キャラクターの妄想や思い込みやSNS画面が頻出することとなりますが、これもProject Engageのメディアミックスの一環として受け止めていただければ幸いです。

——五時二〇分 最寄り駅到着

1 いいね

xx Kisa.love_xx 試験終わったー！

タコはんの買い出しも済んだし

これから彼のお部屋へまっしぐら

もう二週間も顔見れてない

今夜は甘えまくるぞー！

#シユウくん欠乏症

駅前ロータリーから繁華街、そしてオールタウンの裏道へと、エコバッグからはみ出たネギを揺らしつつ、少女が一心不乱に駆け抜ける。

その表情は歩調と同じように弾み、まさに青春を謳歌するJKのようにキラキラと輝いていた。

彼女の名はキサラ。姓はまだない。

ちなみに通っている高校では緒方キサラを名乗っているがもちろん源氏……いや偽名だ。

※ ※ ※

——五時三五分 I & S事務所到着

「ごめんね、最近来れなくて……今週、期末テストだったから」

そんな彼女……キサラは、弾む足取りのまま、とある雑居ビルの二階、「I & S事務所 緒方シユウ」のネー

ムプレートが掲げられた部屋へと入っていくと（侵入方法については割愛）、すぐにエコバッグから取り出した食材をテーブルに並べ、米を洗い始める。

「どうせコンビニ弁当ばかりだったんでしょ？ シュウくん、わたしがいないと、ほんとにさー」

誰からの返事もない部屋の奥に向かって話しかけ続け、しかも会話を巧妙に自己完結させるその姿は少しばかりの薄ら寒さを感じさせないでもなかったが、まあ前述の通り部屋の中に彼女以外誰もいないので問題ない。「ん？」

しかしこの街に住む者たちのほとんどは、この、ちょっとだけメンがヘラつていそうな彼女の本当の姿を知らない。

そう、彼女……キサラこそが、このペイロンシティで最強にして最恐にして最狂の、A級認定悪魔であることを。

1 いいね

xx_kisalove_xx 電気止まってる…

ごはん炊けない

火も使えない

炒め物も、煮物もできない

これじゃ彼に、おいしいごはん作れない

でも、落ち込んでる暇ないよね

こうなったら工夫と愛情で乗り切ろう！

できることをやるんだ！ 彼のために！

もしかしたら、がっかりされるかもしれない

でもいいの、あたし何があっても頑張る

ほのかにゆらめくろうそくの灯りの中

ゆっくりと愛を育てていくんだから

#幸せすぎて怖い #神様から罰が下るかも #日陰の女 #通い妻 #内縁 #誰にも言えない

そして某SNSの零細アカウント【xx_kisalove_xx】の中の人であることを……

キサラがこのように、SNSに重度に依存しながらも、フォロワーたった一人の零細アカウントに引きこもっているのには、闇に病まれぬ……いや、止むに止まれぬ事情がある。

実は彼女は、以前はフォロワー数千人のそこそこ中堅アカウントを持っていた。

そこで日々、恋人との仲睦まじき様子をアップしてはいいねを沢山もらい、その承認欲求が満たされるにつれ、さらに更新頻度と恋人自慢が加速していくという、典型的なキラキラSNS女子だったのだ。

しかしある日、彼女のフォロワーの一人が、キサラと仲睦まじく写真に収まっている恋人の男とリアルで会っていたことが判明し、炎上してしまった。

ちなみに炎上したのはネットではなく、二人が会っていた喫茶店の入っていたビル一棟まるごとだったたりした。

そしてその日から、キサラはその縁起の悪いアカウントを閉鎖し、フォロワーを厳選して裏垢女子として第二のSNS人生を始めることとなったのだ。

……まあそれでも、三年前までほぼ人間の感情を持ち合わせず野獣同然だったキサラが、こうして急速に人間らしい感情を手に入れていったのも、この、人間の光も闇もひつくるめて原液で浴びせてくる、あまりに無慈悲であまりに人間的なインターネッツによるものといっても過言ではない。

それが彼女の人間としての性格形成にとって良いことだったのかはさておき。

※ ※ ※

——七時四八分 夕食前のひととき

「ごめんなさいあたしがいけないのしばらく顔出せなかったし学校がテスト期間だったなんて言い訳にもならないよねなら言わなくてもいいよね何言ってるんだろうねあたしそりゃああなたもあたしのことなんか忘れちゃうよねあたしなんて生きてる価値ないよね本当どうしようもないよね……」

「いただきますー めっちゃいただきますからー」
なにしろ、あれほど帰りを待ちわびていた恋人にちよつと「夕食食べてきちゃった」と言われただけでこの振れ幅である。

これもインターネッツの弊害というものだろうか。

※ ※ ※

——一八時二〇分 生活費枯渇

「もうおしまい……二人とも一文無しなんて生きていけない。一緒にお菓飲んで天国に行くしかない」

さらに、男に生活費を貢いだその瞬間、すぐに代引きで残りの生活費までむしられてしまっただけでこの下がりようである。

1 いいね

xx_kisa.love_xx

#天国でもズット一緒だよ

……いや、これは男が悪い。完膚なきまでに男が悪い。

※ ※ ※

——一九時一二分 出勤

「じゃ、行ってくる」

玄関の方から、シユウの心細げな声がキサラに届く。

それでもキサラは、ベッドにうつ伏せのまま、振り返りもせず、返事もしない。

「さっきの金、明日には返すからさ」

そんなキサラの拒絶を受けてシユウの声は、ますます消え入りそうなほど弱まり……

その、弱々しい勢いとともに扉が閉ざされると、室内に静寂が訪れる。

「現場はレジエストンホテルの地下カジノでさあ」

……と思った一〇秒後にまたドアが開き、シユウが顔を覗かせる。

それでもキサラは、やはり身動き一つしなかった。

「……ま、とりあえず気が向いたら顔出してよ」

そんなキサラの無反応に頭をかきつつ、シユウは音を立てないようゆっくりドアを閉じ、ふたたび室内に静寂が……

「退魔局はC級って言ってるけど、俺の持ってる情報だと、そんな生易しい奴じゃない」

……おとずれた五秒後には、またそうと扉が開かれる。

「間違いない、キサラじゃないと倒せない敵だ」

今までよりも決意を込めた真剣な声でキサラに告げると、みたび扉を閉じる。

今度こそ、今度こそ静寂が……

「あゝ、嫌だな。怖いなら、殺されちゃったらどうしようかなー」

四度目は微妙にモノマネが入っていた。

「いいね」

xx_kisalove_xxしにたい

彼がまた、夜のお仕事取ってきた

あたしのお金でお仕事道具買って

あたしの気持ちなんかなにも考えずに

あたしを夜の街に連れ出そうとする

いつもそう

あたしに何の相談もなく決めてくる

あたしはベッドから出ない

考えるのもイヤだ

彼は一人で部屋を出ていった

あたしの愛を、お金に替えて

あのブス悪魔のもとに行っちゃった

彼がドアを閉じる音が、耳から離れない

機嫌がなおったら来てって言ってたけど

今のあたし、立つ気力あるのかな？

あたしってなんなのかな

彼の、なんなのかな

#行かないで #置いていかないで #今すぐ戻ってきて #戻って強く抱きしめて #愛してるって言って

#七兆回言って #行っちゃった #病む #病み垢さんと繋がりたい #疲れた #人間やめたい #そもそも

人間じゃない #死にたい #死ねない #死んじやいたい #でもやっぱり死ねない #てゆうか死なない

#天国ってどんなところ？ #神様っているのかな #まあ悪魔はいるけどね

「ちょっとキサラさん！ SNS更新してる暇があるなら仕事手伝ってよ！ あとハッシュタグがアレすぎない？」

五度目はよくわからない言いがかりだった。

※ ※ ※

——一九時二六分 レジエustonホテルベイロン到着

「来ちゃった……」

と、まるで、かつて「もう二度と家には来ないでくれ。妻もいるんだ」と言われた男のマンションを見上げるような風情でキサラは呟いた。

実際には、彼女が立っているのは、警察により非常線が張られ、とても物々しい雰囲気の高級ホテルの前だったのだが。

「行かなくちゃ」

まあ、それはともかく、キサラはビルを見上げると、ゆっくりとその壁に近づき……

「だって、シウくんは……」

そして、自らの体を、その壁の中に吸い込ませていく。

xx_kisa.love_xx やっぱ来ちゃった

いっつも、いっつもこうなっちゃう

都合のいい女って思われちゃうかな？

ううん、もう思われてるよね

あたし、絶対軽く見られてるよね

でも、しょうがないよね

あなたは、あたしがいないと、何も、できないんだから

だから、あたしがあなたの剣になる、盾になる、なんにでもなる
ぜんぶ受け止めてあげる

#愛してる #愛されたい #愛し愛されて生きるのさ #自分語り #自発ください

※ ※ ※

——一九時三七分 儀式

「俺は、どうしても、奴を倒したいんだ」

キサラの目の前、唇を突き出せば届くくらいの距離に、シウウの顔がある。

「そのためには、キサラの力がどうしても必要でさ」

「するの……？」

「ま、まあ……」

「二人の愛の力でパワーアップってこと……だね？」

「えーと、少しニュアンスは違うんだけど」

その瞳は彼女を妖しく見つめ、吐息は熱く、荒く、今にも自分を激しく求めてくる、とキサラは確信した（個人の感想です）。

「目、閉じて」

「できれば優しく……んんっ!?」

「んっ……」

シウウの唇が、キサラを食る（個人の感想です）。

「ん、んう……っ」

「ん、ん、んぐ……っ」

シウウの舌先が、キサラの唇の中に捻じ込まれ、歯茎を優しくなぞった後、舌に絡み、そのまま喉奥に唾液を流し込む（個人の感想です）。

xx_kisa.love_xx 彼の唇が

唇の柔らかさとともに

唾液の甘つたるさとともに

流れ込んでくる

ああ、駄目だなあたし

また、彼に摔げちゃう

彼に、摔げられたから

彼女のことは忘れただなんて嘘

愛してるのはあたしだけなんて嘘




嘘、嘘、なんにもかも嘘

でも今は、そんな嘘に飲み込まれてしまう

彼の睦まじれの強引なキスに、全てを委ねていくの

#嘘つき #シウくん、嘘つき #嘘つき #嘘つき嘘つき嘘つき！

※個人の感想です

——一九時四一分 痴話喧嘩

「だって、だって、シュウくんさあ、今まで我慢してきたんだけどさあつ！」

「こ不満とかい要望とかは今じゃないときにしません!」

そして、あの熱い儀式からたった四分後にこれである。

「でもシェウくん、家にいるときはいつも疲れてるとか、明日にしようとか言い訳して逃げてばかり

[5]

「明日聞くから！ この戦い終わつたら話そう？ ね？ ね？」

キサラの振り回す剣が、結構ガチでシユウを捕らえかける。

慌てて尻餅をつくシュウに、とうとうキサラの剣の切っ先が突きつけられ……

なお、アニメでのこの構図は、とある作品を意識した訳ではない（そんな訳はない）。

「なら、今ここに約束の証を……」

「そ、それって……？」

[illegible]

こんな小さな鉄のギザギザが

Engage
エンゲージ・キス
Kiss

クズと悪魔と男と女 ～Kisara～

丸戸史明

発行：2022年9月28日

発売元：株式会社アニプレックス
〒102-8353 東京都千代田区六番町 4-5

編集協力：萩原 猛（オルクス）

装丁者：BALCOLONY.

印刷・製本：株式会社ソニー・ミュージックソリューションズ

※本書は、法令に定めのある場合を除き、複製、複写することはできません。

※NOT FOR SALE

©BCE / Project Engage
ANZX/ZB 15641
Printed in Japan